

も残っている。

集落の発生は、たたら師のまわりに鉄穴流し、木炭生産、たたら吹き、鍛冶などの労働者が住みついたことに始まる。株小作の発生も鉄師のもとで難民が収容されていったことに始まる。農地解放によって田つきの山である採草地（柴草山）は田と共に解放されたが、農民が薪炭利用していた山は地主のもとにとどまった。中国山地放牧地帯の典型として鳥上の入会的共同牧場の分布変遷をみたが、昭和40年頃までは個人牧場・企業的牧場が増えて発展が期待されていたが、現在では過疎化による労働力の減少、役牛から肉牛という生産目的の変化により、山地放牧はほとんど行なわれていない。農業は水稻プラス畜産の型だが、水稻にウェートが高く、畜産農家は減少している。林相は広葉樹林が多く、また私有林がほとんどであるが、鳥上には大山林地主はいない。県内の他の地方では鉄師が今も大山林地主になっているが、ここはそうではなかったのは、最後までたたらに固執して造林を戦後までしなかったこと、したがってたたらをやめてからの山林利用として、用材林となる斜葉樹がなく、財産を築けなくなり落ちぶれていったためである。たたらに固執したため時勢に乗り遅れ、また逆に時勢に遅れていたからたたらに固執していたとも言える。

砂鉄採取はその後も日立金属によって鳥上羽内谷鉾山で続けられている。たたら製鉄の方は、いわゆる鉄師によるものは大正14年に鳥上の鉄師が島根で最後の火を消した。その後東京の日本刀鍛錬会の鉾が昭和8～20年、また日本美術刀剣保存協会の鉾が昭和52年から始まったが、これは文化財として伝統技術の保存を目的としている。したがって地元の産業には影響はないのだが、これや遺跡を見学する人が全国から集まり始め、ここに再び、たたらによって鳥上が注目を集めた。過疎地と一言では片づけられない大きな文化財を持った山村である。

藤 沢 市 の 商 業

森 口 由 美

東京から約50Km、横浜から約30Kmの位置にある藤沢市は、昭和40年頃急激に都市化し、東京の近郊都市としての性格を強める一方、独立湘南都市としての一面もまだ残している。

さて、この藤沢市に、最近多くの大型店が出店し、大きな変容をとげたと聞いた。実際に、藤沢市商業が、どの程度の、どのような内容の発展をなしたか考察する事によって、発展の結果、藤沢市の中心性が高まったかどうかを調べてみた。

そのために、まず藤沢市商業の発展を、神奈川県諸都市と比較しつつ、統計的に検討した。藤沢市は、かつては卸売の中心地であったが、現在、卸売業はあまりふるわず、小売商業都市である。その小売業は、人口一人当たり小売年間販売額59.7万円/人で、県下第3位であり、しかも、昭和45～51年にかけてのその増加率は150%以上であり、県で最高である。ただし、小売商店数の増加は昭和40年頃をピークとして、下り坂であり、最近はあまりふえていない、この事は最近の商業発展が大型店の出店という特殊な事情によるものである事を示し、小売販売額における各種商品、大型小売店の非常に高い構成比がそれを裏づける。

市内においては、その大型店出店がほとんど藤沢駅周辺であったので、他の商業中心地である辻堂・長後を大きくひきはなすのだが、その藤沢駅周辺を中心に、昨今の商業発展を、市の調査、商店街・大型店の方々のお話にもとづいて、より詳しくほりさげてみた。

大型店出店は、昭和40年前半の大きな人口増加に比して、藤沢市の商業力は相対的に低く、大型店にとって魅力ある場所であったためなされたものであるが、その実現には市の都市計画事業（南口土地地区画整理事業、再開発事業）や法律規制（防災街区造成法、都市再開発法、大規模店舗法）が大きな誘因として働いている。ともあれ、昭和48～49年にかけて、商圈人口の増大、流出客の吸収をみこんで、7店の大型店が新造成・ないしは増築を行なった。

しかし、これほど多くの大型店ができたわりには、藤沢市の商業力・中心性は伸びなかった。確かに、藤沢市年間販売額はふえたが、予想を下回るもので、販売効率の低下をまねき、大型店過剰といわれた。商圈も、新興の厚木市・大和市などにおされて、それほど大きくならなかったし、東京・横浜へ買物に出る割合（流出率）もだいぶへったものの、呉服・神士服などでは、東京・横浜への流出率は依然として約25%である。これは、藤沢市大型店のファッション性に信頼がおかれていなく、2流デパートとみられているからである。一方、商店街も、南口本通り、ファミリー通りの様に大型店と共存をはかり、盛んになったのは一部で、大部分の商店街は、昔ながらの商店街であり、藤沢市商業の発展の足をひっぱっているといえる。

この様な実態は、大型店・商店街とも自覚しているものである。大型店は、各店の特色をだす事によって、顧客の獲得に懸命であるが、一般に売り上げは不振で、昭和53年になって西友ストアー、志沢が閉店した。

同時に、53年秋には、藤沢西武、藤沢サイカ屋が、今までの大型店の欠点を直して、高級な品揃え、都会的な雰囲気でもって、売り込みに加わった。しかし、この2店は、高級都心百貨店としては物足りない面もあり、横浜に近いだけに、京浜への流出客を吸収し、湘南の中心的商業都市になるのはむしろかしいと思われる。

中国山地過疎村の地理学的考察

森 山 美知子

第2次世界大戦が終末を迎えて、わずか10年余で日本は急速な経済成長の道を歩み始めた。東京や大阪などの都会が、日本の経済成長のシンボルの如く、多数の人間がそのような都会に集まっていった。しかし、その反面、地方の農山村では人口減少の道をたどる地域も増加していった。この現象は村自体の活気を失わせ、人間生活に必要な機能を消滅させるところも出てきた。私の住む岡山県の北部にある中国山地の山村も例外ではなく、地方新聞にとりあげられることもしばしばあった。

このようなことから、中国山地という僻地に存在する村では、過疎化がかなり進んでいるだろうというイメージが私の頭の中にあっただ。そのようなとき、岡山県の最北端に位置する、まさに中国山地の村である上斎原村を訪れたのである。時はスキーシーズンであり、多数のスキー客で賑わい、民宿